



まず、私がタイのHIV孤児の家、「バーンロムサイ」に行くまでの経過を簡単にお話したいと思います。

私は山梨英和高校の2年生の時、ロータリークラブの交換留学生として、1年間タイに留学しました。英和高校卒業後、大学に進学し、企業に就職しましたが、「もう一度タイで生活してみたい」という思いを持ち続けていました。そんな時、偶然バーンロムサイの代表である名取美和さんの著書を読み、バーンロムサイに興味を持ちました。1年間のボランティアスタッフを募集していることを知り、会社を退職して、バーンロムサイの事務ボランティアスタッフとして、タイのチェンマイで生活しました。



バーンロムサイは、もともと東京でデザイン関係の仕事をしていた名取美和さんによって開設されました。チェンマイに医師をしている友人を訪ねた時、多くのHIV感染女性がいることを知りました。彼女達がHIVに感染している自分の子どもを思いながら次々と亡くなっていく姿を目の当たりにして、残された子ども達が安心して生活できる場を提供したいと始めた施設です。

何よりも、一人一人の子どもの個性を伸ばし、愛情と時間とお金をかけて子どもを育てていくという美和さんの考えにもとづき、開設から10年経った今、5歳から17歳の31人の子ども達が生活しています。それに加えて、10人のタイ人スタッフ、ボランティアを含む6人の日本人スタッフが働いています。開園当初は、エイズを発症する子どもも多く、10人の子どもが亡くなりました。しかし、抗HIV療法を始め、薬を飲むようになってからは、1人の子どもの命を失うこともなく、子ども達は毎日元気に学校に通い、将来の夢について考えることもできるようになりました。

バーンロムサイの大きな目標は、自立するということにあります。それは、子ども達の自立と、施設自体も寄付だけに頼らないように、自立して運営していくことを目指しています。縫製所を運営して、衣類や小物などの製品を日本やインターネットで販売したり、チェンマイ市内にレストランやゲストハウスを建てそこでの収益を施設の運営にあてています。また、縫製所やレストラン、ゲストハウスではHIVに感染している地元の人々を雇用したり、いずれは、施設の子ども達の将来の働く場所の一つになれば、

と考えています。

子ども達は全員HIVに感染した母親から母子感染によってHIVに感染しました。ですから、生まれたときからHIVに感染し、さまざまな理由で孤児となり、タイの国立の孤児院に預けられた子ども達です。その国立の孤児院からバーンロムサイは31人の子どもを預かっています。HIVに感染している子ども、といっても外見上は健康な子どもと何一つ変わりません。1年間一緒に暮らし、彼らがHIVという不治の病に感染していることを忘れてしまうくらい、子ども達は元氣いっぱいです。一緒に遊び、ご飯を食べ、宿題を



見てあげたり、と普通の生活を過ごしました。バーンロムサイで過ごしている間、HIV感染している人と自分でも驚くほど自然に生活することができました。おそらく、この会場にいる多くのみなさんは、直接HIVに感染している人に出会ったことのある方が少ないと思います。そして、少なからずこの病気に対して怖い、とか一緒にいて感染しないのかな、とかマイナスのイメージを抱いていると思います。私自身も、バーンロムサイに行く前に、HIVに感染している人と接したことはありませんでしたし、全く不安がないわけではありませんでした。知識と情報ではHIVがどのように感染するのか分かっていましたが、実際は、もし、子どもが出血したらどうしよう、などという心配はありました。しかし、ひとたび子ども達と会えば、病気に対する怖いという思いはすっかり消えてしまいました。子どもを抱きしめて、手をつなぎ、同じ食卓でご飯を食べ、同じトイレやお風呂を使う、というような生活の中で感染することはないのです。

わんぱく盛り子ども達は転んだり怪我をして出血することもありましたが、直接血液に触れないように気をつけ、その後はしっかり手を洗うようにしていました。子供たちだけでなく、バーンロムサイに関連する大人達にもHIVに感染している人が何人かいましたが、彼らとも本当に普通に分け隔てなく接することが出来ました。当時はそれが当たり前のことでしたが、今振り返るととても貴重な体験です。

また、子ども達の元気な毎日は、薬のお陰です。毎日朝7時、夜7時、薬の時間があり、保母さん保父さんが必ず薬を飲ませます。しかし、この薬に関して大きな問題に直面しました。夜7時という時間は、年少の子どもはもちろんホームに戻っている時間ですが、中学生くらいになると学校の行事で帰りが遅くなったり、友達と外出したりと、7時に家に帰って来られない場合もあります。そのような時は、自分で気がついて、薬を飲まなければなりません。

しかし、友達とのおしゃべりに夢中になっていたりと、遊びに夢中になっていたりと、うっかり、また1回くらい飲まなくても、と薬を飲み忘れる中学生が何人かいたことが分かりました。この薬がなければ、確実に身体の免疫が落ちてエイズを発症する可能性が増えてしまいます。しかし、薬の飲み忘れによって、大きな自覚症状は起きないので。薬を飲まないでいても、しばらくは、痛くも痒くもないわけで、子どもにとってはなかなかその重要性がわからないのです。そのため、中学生の子ども達を集め、薬の大切さをタイ人スタッフが繰り返し話したり、実際エイズを発症した人がいる場所に連れて行き、エイズを発症した人たちと子ども達が直接触れ合う機会を作ったりしました。



また、思春期に入った子ども達の恋人のことや、友達への病気の伝え方でも悩みを抱え始めました。最近、2週間くらい前、バーンロムサイの子ども達を長年診療して下さっているお医者さんが、ホームに来て改めてHIVについてお話して下さった、とのことでした。当日は、年少の子どもと年長の子どものグループにわかれ、歌や踊り手遊びなども交えながら、子どもの話を聞いたり、それぞれの年代に合わせた先生のお話を聞いたそうです。そのときの様子をバーンロムサイの現地の日本人スタッフに聞いて見ました。

そのスタッフからのメールを読ませてもらいます。

HIVウィルスの存在をどう思うか？という質問に子どもの一人は、「小さい時から一緒に居るから、友達みたいなもの」と言っていた。もちろん生まれた時から感染していることを辛いと思った時期もあるでしょうが、今はその壁を一つ乗り越え共存することを受け入れているというのがとても印象に残っている。これはHIVに感染している人、あるいは持病を

持っている人にしか分からない感覚だとも思った。

ホームの最年長で17歳になるミルクという女の子は、以前友達に自分がHIVに感染していることを話し、「そんなのなんとなくわかってたし、一緒に居ても全然うつる病気じゃないというのもわかっているから平気」と友達が言ってくれたのだと、嬉しそうに話していたのはもう2年前のことだと思う。

そしてミルク以外にも、2名の子どもが自分が感染していることを友達に話し、そしてそれが分かった上で今も仲の良い友達でいる・・・と聞いた時には、嬉しかった。もちろん言う必要があるかどうかは、個人の自由だと思う。

タイの国では、まだこの病気に取り組み始めた歴史が浅いので日本や欧米ほど進んでいないが、妊娠してきちんと最初から処置をすれば母子感染を防いで出産出来る確率がとても高くなっているなど、医学的にも進歩して来ている話もして下さった。つまり、ホームの子ども達も結婚して、自分の子どもをもつこともできるのだ。

一番これから大きな問題となってくるのがセックス。相手を感染させてしまう確率があることと相手が違う型のHIVウィルスを持っていたら薬の耐性が出来てしまうなどセックスに関しては何度も話し合う必要があると実感した。男の子はタイ人スタッフたちが、様子をみて話してくれているが、やはり女の子から「コンドームをつけて！」と言にくいところがタイでも日本でもあると思う。

という内容のメールでした。子ども達が、HIVを誰かに感染させてしまう、ということは絶対にあってはなりません。そのためにも、まずは自分の身体でおきていることを理解し、思春期に入った子ども達にはどのように愛する人に感染させないようにするのかをしっかりと伝えることが必要です。また、バーンロムサイではホームの子ども達以外に、地域の子ども達に対しても、HIVについて知ってもらう活動を行っています。ホームには日本の支援で建てられた2階建ての図書館があり、それは地域の人々にも開放されていて、自由に本を貸し出ししています。ホームの子ども達が病気を理解することも重要ですが、同じように地域の人々や学校の友達がHIVに対しての偏見を捨て、正しく病気のことを理解してくれれば、ホームの子ども達にとっても生きやすい社会になっていくのでは、と思いました。

また、先ほどの現地のスタッフからこのような話も聞きました。

HIVウィルスが子どもたちの体や脳の成長になんらかの影響を及ぼしていることは、やはりあり得ると日本のお医者さんにもタイのお医者さんにも言われている。高学歴を望むのは難しい子どもの方が確実に多いバーンロムサイでは最初から代表の名取美和さんが言っているように何か一つ好きなこと得意なことを見つけてそれを職業として自立する、というのがとっても現実的な話となってきた。

ヌンという高校生の男の子は、「自動車の修理工になって、将来は自分のお店を持ちたい」という具体的な夢に向かって、技術を習得しているのを見ると、他の子ども達もそれに続いて欲しい、何か見つけて欲しいと切実に思う。また、別の高校生の男の子、ナットのように日本へ留学する！という夢にむかって突き進んでいる子もいる。塾に通い、かなり漢字も読めるし書けるようになった。

何か目標が出来、それにむかって努力しその成果が現れると、また頑張れる。良い流れが出来ているので他の子どもたちも早い、遅いは個人差があるけれど、いつか絶対何か見つけ手に職を付けて、自立して欲しい!と思っている。

という内容でした。私がホームで働いていたのは、3年前になりますが、進路のことで悩んでいた中学生の彼らが、今、夢中になれることを見つけ、それに向かってがんばっている姿は、とても嬉しく感じます。それを陰ながら支えられるように、また社会がHIVという病気を持った彼らを受け入れてくれるようになることを、強く願っています。

(2010年3月13日

「第3回エイズ文化フォーラムin山梨」講演)